

Newsletter 3

October 2024 no. 3

CCI 文部科学省科学研究補助金
基盤研究 (S)

アフリカ狩猟採集民・農牧民の
コンタクトゾーンにおける子育ての
生態学的未来構築



CCI Grant-in-Aid for Scientific Research (S)

Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa



目次 Contents

インタビュー

特集1メンバー 安岡 宏和	03
特集2メンバー 橋彌 和秀	20

活動報告

紙芝居プロジェクト	32
海外派遣報告	34
主な業績 / 関連イベント	35

事務局より / 表紙を語る	38
---------------------	----

インタビュー 特集 1

メンバー 安岡 宏和

(インタビュアー:高田 明, 林 耕次, 杉山 由里子)

1. 生態学的知識の再編 / 伝統的知識の授業化と子どもの EK 習得

(1) 伝統的知識の授業化と子どもの EK 習得

林：安岡さんの研究では、カメルーンのパカ・ピグミーを対象に、長期狩猟行（モロンゴ）やワイルド・ヤム・クエスチョン、最近では、森の資源を持続的に利用するなど、人間と森との関係について、広く扱っていらっしゃいます。高田さんの科研プロジェクトでは、子ども間の相互行為や養育について扱っておられますが、安岡さんのこれまでの研究と関連はありますか？

安岡：ぼくは、高田さんのように相互行為そのものを記録するというよりも、子どもたちがどのような知識や技術を身につけているか、それがどのような場面で発揮されているのか、といった民族誌的な記述をすることになると思います。

林：実際にデータとかではどうですか？

安岡：ぼく自身はタイムサンプリング法のような方法でデータをとったことはありませんね。生業活動についていって、いろいろ一緒にやってみて、収穫量を計量する、といったやり方が多いですね。

林：高田さんのプロジェクトの中で、「言語の身体化と言語環境の再編」という研究課題のひとつがあって、カメルーンでは、「自然資源マネジメント政策の導入に伴う「生態学的知識」の再編（熱帯雨林分割）/ 伝統的知識の授業化と子どもの EK 習得」という内容が挙げられています。

安岡：「授業化」というのは、学校を作る、とかそういうことですか？

高田：幼稚園とか小学校で、授業までいければいいけど、ちょっとした青空教室みたいなのもいいし。安岡プ

ロジェクトで、伝統知とか学校でもハイブリッドで扱っている…、それを子どもの文脈で生態学的な知識でどうなっていくのかな…ってのを考えて行けたらなと、このプロジェクトにおいて。

林：（安岡さんが代表の）SATREPS では、「「在来知」と「科学知」の協働」とありますが、高田さんのプロジェクトでは、生態学的知識と伝統的知識を子どもたちが受け入れているのか、と。

(2) 現地の“教育”の今

安岡：「伝統的知識の授業化」がどのようなプロセスになるのかを想像したとき、バカのなかでも地域によって学校教育の普及の程度がかなり違っていることを考えておく必要があると思います。我々がフィールドにしてきた地域では現在でも日常的に森のキャンプに行き生活することが多くあります。しかし、もっと町に近い地域だと、学校に通うのがふつうになっていることもあります。それで、このプロジェクトではどちらに焦点をあてるのがよいでしょうか。

高田：両方見たいね。むこう（カメルーン）に行き思ったのは、NGO とかミッションナリーの影響が地域的に大



写真1 インタビューのひとつ

きくて、そのインパクトを受けている人たちと、そういうのを回避しながら生活している人たちがいるな、と思って。ここで言っている「教育」って、凄い広い意味やから、日常生活のなかで親から伝わるとか自分で自然のなかで身につけるとかも入っているんで、社会全体で大きな、いろんなファクターが関わってきて、かつ、グリベみたいに伐採道路があって、(国立)公園になっているところと、ガンガンまだ樹が切り出されているところに分かれているときに、一体、グループ内での多様性がどういう風になっているのかというのは、面白そうだな、と。だから、(安岡プロの)「知識班」とは関心が重なっていると思うけど。

林:まず、アフリカ南部のブッシュマンがいるところと、ピグミーがいる熱帯地域では状況は異なると思います。カメルーンの南東部でも NGO とか教育の入り方が地域によって異なるんですよ。私がかつと調査をしていたドンゴ(コンゴ共和国との国境沿い)とか、安岡さんの調査地であるズーラボットとかには、(2000年前後には)そんなには入ってなかった。今ではどうか分かりませんが、現在メインで調査を行っているロミエとかでは大きな街に近いということもあって、昔からいろいろ動きがあって、教育などでも各機関などからのサポートがあったようです。

安岡:あと、ボスケなんかも、古くからカトリック・ミッションが入っていて、バカ語の辞書なんかも作られて

きましたね。ブッシュマンで、修士を取得した人がたくさんいたりとか、教育水準が高い気がしますが、バカにもそういう人たちがいるのかな、という気になります。ボスケあたりのバカは、中学校を出ている人もたくさんいるみたいですが、さらに上の学校まで進学している人もいるんでしょうかね…。

林:私は会ったことないですね。

安岡:いずれにしても地域によっては、昔からカトリック・ミッションや NGO のサポートがあったりしますね。

高田:ミッションの辞書を作った方(Robert Brisson さん)は、今もご存命?

安岡:いや、たぶんもう亡くなっていると思います。YouTube に映像が残っているのを観たことがあるんですけど。このまえ、Jerome さん(University College London)と一緒に村の前を通ったんで、「ここが Brisson の…」という話をして、「YouTube で見たんだけど、まだ存命ですか?」って尋ねたら、「いや、それはないだろう」という返事でした。

林:少し話を戻しますけど、先ほど、安岡さんのフィールドでは学校はないと仰っていましたが…?

安岡:ぼくのフィールド(ズーラボット・アンシアン村)では、学校の建物はあるけど、先生がいない。建物は、伐採会社が提供した板で造ったんだけど。先生が来さ



写真2 ニューカデにあるドロップアウトした子供たちが行く教育施設(杉山 由里子 撮影)

えすれば、やるんだけど、来たとしても病気になったりして、すぐいなくなりそうです。

林：ほかにグリベとか他のフィールドでバカの子もたちが教育を受けているという現場は、みたことがありますか？

安岡：ズーラボットではじっさいに授業を受けている場面は見たことないですね。田中さんが調査をしている隣村のガトー・アンシアンは、先生がいて、田中さんが見に行ってたんじゃないかな？

林：おそらく、私とか安岡さんは、学校教育というよりは、森でどういったことを学ぶのか、ということに関心が強いと思うんですね。

安岡：それはそうですね。

高田：学校で教えるというのもやりたいんですけど、ブッシュマンのところもそやけど、授業って難しい。幼稚園にしても、カリキュラムで「今日はPをやります」って言って、ずっと「P」の単語を言わして、「じゃあ、あしたはQです」って、それでずっとそれでモチベーションを維持するのは大変で。それで、やる方も、ずっと子どもの注意を引きつけて、生き生きとさせるって、

まあ、教えるのは難しいけど。でも、学校とって建物が建つとか、先生を雇うお金がつくとかがぐらいで、コンテンツまで考えてくれるところって少ないから、プロジェクトでも。

安岡：ズーラボットでは、ある年代の人だけ、いま40歳前後くらいの人だけ、けっこうフランス語ができる人がいるんですよ。なぜかという、その人らが子どもの時に先生が来て学校があったようです。その人が死んじゃって、そのあと代わりの人が来なかったんですね。だから、その世代の人はわりとちゃんとしたフランス語を話すのですが、それより下は、もうぐじゃぐじゃな感じですね。ただ、この地域ではスワヒリ語とかリンガラ語みたいな現地のメジャーな言語がないから、フランス語は民族間の共通語で、商売の言語なので、フランス語を学ぶモチベーションは、それなりにあります。町から来た商人とかと話すときはフランス語になるから。スワヒリ語とかリンガラ語圏では、どうなんでしょう？

高田：小学校3年生ぐらいまでは現地語っていうのは、わりと推奨されているけど、少数言語がいくつもある地域が多いから、予算的にも教員確保的にもなかなか難しくって、地域に拠るって感じかね。



写真3 焼き畑キャンプの情景。狩猟採集民とよばれるバカたちは、こんにちでは農耕も生業としている。
(安岡『アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチピース歴史生態学』より*)



写真4 キャンプの風景 (安岡『アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチピーシーズ歴史生態学』より*)

(3) ミッションリー, NGO, 国家と“教育”

林：いま安岡さんが仰ったような、ある世代だと教育を受けてフランス語を話すと、その家族とか集落に波及していくようなことはありますか？

安岡：同じレベルでのフランス語が、っていうのはあんまりない気がしますね。フランス語自体は、そのうち耳で覚えるから、子どもたちでもだんだんしゃべるようになっているんだけど、そのある世代の人たちのようにはしゃべていない。

高田：歴史的にみたときには、カトリックがけっこう強いんだっけ？

安岡：そうですね。

高田：ミッションが主導しているのと、政府が主導するのってずいぶん学校の性格も変わってくるやんか。僕が行っているナミビアなんかは、独立前後でガラッと学校のやることなんかが変わっちゃただけで、そういうのカメルーンでは？

安岡：それは、あんまり知らないなあ。

林：ミッションと政府では、おそらくだいぶ違うでしょうね。

高田：聖書の時間とかすごい長いこと取ったり、実用的な農業の時間とかをすごいってあったりとか。

安岡：教科書は見たことがあるんですけど、バカが森で採集しているところとか、農作業をしているところとか、そういった場面の4コマ漫画みたいな絵が描いてあって、「これをフランス語でなんて言う？」みたいなやつですね。そういうのとは違っているんですか？それは NGO が作ったものだと思います。

林：NGO の影響は大きいですね。Messe さんのところ (Association Okani) のところもそうだし、最近、ロミエで見た国際 NGO の援助を受けつつ、地元の NGO が就学前のバカ子どもたちにバカ語を教える。なんか保育園みたいなイメージで、2020 年だったかな、コロナ禍前にみたことがあります。それは政府とかミッションとかとは違う路線だと思います。

安岡：そういうのって、少数民族の知識とか言語が近代化のなかで消え去りそうなところで、それを保存し



写真5 独立記念日に自作のボツワナの旗を持ち祝うブッシュマンの子どもたち (杉山 由里子 撮影)

なければ、っていうモチベーションの NGO とかもいるじゃないですか。ぼくらの地域では、まだ、消滅しそうな知識や言語を保存するためのサポートっていうのは、あんまり必要ないかもしれないなあ、っていう気がするんですけど。

高田：ある程度、自立しているから…。

安岡：まあ「ぼくらの」っていうのは、もちろんバカ全体のことでなくて、ぼくがフィールドワークをしている地域では、ということですけどね。バカのなかでも、たとえばもっと町に近いところでは、地域内で見たら、そのような状況の人がいるかもしれないんですけど。

高田：…危機を身近に感じるような…。

安岡：…感じじゃないなあって。

高田：人口もだいぶ違うよね？何万人かおるよね、バカ・ピグミー。

安岡：それ、わかんないんですよ。1980年くらいの人口調査で3万から4万くらいという数字があって、みんなそれを引用しているんですが、そのあと民族ごとのセンサスがないから、いまだどれくらいの人口なの

かは、誰にもわかりません。40年前で3万から4万人だと、いまはだいぶ増えている可能性もあります。

高田：バカだけで、ということ？

安岡：バカだけで。

高田：サンと比べたら多いね。

杉山：言語学者の中川さんに拠ると、サンの言語は自然な言語の変化というよりは、衰弱に向かっているのは間違いないと…。

安岡：それは何に、カラハリ（語）とかに吸収されるの？

杉山：ツワナ語

安岡：そうですか。

高田：サンは多いところで5,000人とかなあ。

安岡：ツワナ語って国の言葉、国語ですよ？バカだと、それはフランス語になりますね。でも、バカたちの話す言葉がフランス語になるとは思えない。じゃあフランス語にはならないとして、バカ全体が吸収されるような言語があるかっていうと、ないですね。人数でいうとバカ語の方がマジョリティの言語で、農耕



写真6 モロンゴ（森での狩猟採集生活）。キャンプへ移動するバカたち。野生ヤマイモを求めて。
（安岡『アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチピース歴史生態学』より*）

民のほうがバラバラだから、っていうのもありますよね。バカが分布している地域には、15とか20の農耕民がいるんですが、バカに対するマジョリティの言語ってないんですね。ただ、農耕民の言語は、だいたいバントゥー系なので、たがいに似てますけど。

2. 狩猟採集民と農牧民の多様性

(1) 農牧民についての研究

林：高田さんの科研のタイトルが、「狩猟採集民と農牧民のコンタクトゾーンにおける」ってついていますけど、そういう意味で、明らかに違う。安岡さんが言ったように、南部アフリカと違って中央アフリカの場合は、付き合っている農耕民・農牧民がすごく多様なんですよ。

安岡：ちっちゃい民族がいっぱいいるっていう感じがすかね。それらの農耕民どうしのがどういう関係かっていうのは、ぼくはあんまりわかんない。

高田：こんだけ長く調査されてるけど、意外にそっちにフォーカス充てた方は少ないんやね。

安岡：だいたい農耕民の研究をしてるって言っても、農耕民のあるひとつの民族だから。

林：同じバカを対象とした研究者でも、地域によって付き合っている農耕民が違うから、どここの農耕民は意地悪だ、とかいう話しは聞きます。そういう情報交換で、農耕民の特性を聞いたりしますね。

(2) 森と“教育”

高田：あの、学校じゃなくて森との関わりで、変化を感じる？長いこと行っていて。

安岡：ズーラボット村では、やはり国立公園にまるとすっぽり入っちゃったのは、かなりの影響があります。村から5キロ歩いたらもう国立公園で、そこでキャンプすることは禁止ってことになっているから、恐る恐る生活していますね。いままで使っていた土地の95

パーセントが国立公園なので、だから普通に生活していたら、必然的に国立公園に入ることになるんですね。たまにエコガードが来て、追い出されるっていうのを怖がってますね。まあ、パトロールはたまにしかないので、ばったりエコガードと出会ってしまったら、運が悪かったというかんじですね。だから、実態としては、あんまり変わっていないといえるかもしれませんね。

高田：見つかるとなんか罰則があるの？

安岡：例えば、(罾に使う)ワイヤーを全部取り上げられたりとか、キャンプはみんな壊されて。

高田：本当？結構深刻…。

安岡：まあ、小屋といっても細い木を組んで葉っぱをひっかけただけのモングルなんで、すぐに作れますが。グリベでは、国立公園と村のあいだにサファリハンティングのエリアがあるんですが、サファリ会社のパトロール隊はもっと乱暴みたいです。

林：あと、暴力事件なんかも起きてて、人権問題として取り上げられたりもしますね。

安岡：それはサファリ会社が営業しているときに、パトロール隊を組んで民兵団を雇ってパトロールしています。

林：子どもたちが村にいるよりは、森に行って一緒に狩猟採集とかを学びたがるかみたいなのはどうですか？

安岡：学びたがるか、っていうか、日常生活のなりゆきなかで子どもも森のキャンプに行ってますね。そのような生活が、まだ維持されています。

林：そこでいわゆる民俗知識とか技術といったものも実践されていく？

安岡：そうですね。…だから僕も、もうちょっとそうじゃない地域でみるのも、この機会にいいかな、という気もしますけどね。

高田：サンが行くときの狩猟と違って、(子どもが)一緒について行きやすい感じ？採集の方は行けるけど、狩猟だと足手まといになり易いし。



写真7 木に登って蜂蜜を収穫する。
(安岡『アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチピースーズ 歴史生態学』より*)

安岡：馬に乗ったりとかですか？

高田：ロバや馬だったら、10代半ば以上じゃないとなかなか難しい。

林：バカの場合は、基本は罾(猟)ですし。

安岡：罾もそうですし、ゾウ狩りにもついていきますね。いまはゾウ狩りはほとんどありませんが。

林：それは(ゾウが)捕れてからではなくて？

安岡：捕れる前です。鉄砲をもっているのは一人ですけど、鉄砲以外にみんな槍を持って参加します。多いときには20人くらいになります。10歳とかそれ以下の子どももついていきます。ゾウ狩りといっても、ゾウの足跡を探して森のなかを歩くのが、そのほとんどです。ゾウを見つけて、これから撃つぞ、という段階になると子どもたちは木に登って待機します。ぼくも一緒に木に登りました。もちろん、いまでは、さすがにゾウ狩りの取り締まりは厳しくなっていて、見つかったら大変なことになるので、ほとんどやっていません。

かりにやるにしても少人数の大人だけで狩りに行くのがほとんどです。

高田：サンやったら、弓矢猟で足跡をちゃんと見ないとあかんから、わりあい慎重に足の歩みを進めるとい感じやと、そんな大集団でぞろぞろという感じにはならへんけど。まあ、(バカの) 掻い出し漁とかだと一緒にみんなで行く、みたいな感じだし、いろんな猟/漁のバリエーションがあっいいね(?)。

安岡：あと狩猟でも採集でも、蜂蜜を探すのは重要で、蜂蜜採集では子どもも活躍しますね。

高田：貢献できるよね(笑)

安岡：木に登って。身軽だし、っていうのもありますね。

3. 基盤Sプロジェクトと安岡さん

(1) 今後の展開

林：高田さんとの共同研究についてお伺いします。これまで、安岡さんと高田さんは、このASAFASなど近い環境で長年研究されてきたと思うんですけど、今回(基盤S)や安岡さんのSATREPSのように、同じプロジェクトで共同研究というのは過去にも何度かあったんですかね？

安岡：いや、SATREPSのメンバーに入っていて、ぼくも基盤Sに入ったというのが、ここ最近のからみですね。ただ、市川さんや木村さんのプロジェクトに

一緒に入っていたりとか、そういうことはありましたか？

高田：どうだったかな？(笑)

林：高田さんはもともと、心理学とか子どもの養育とかがご専門ということもあって、同じ狩猟採集民研究、生態人類学といっても方向性は違うんでしょうけど、例えば、伊谷(純一郎)先生のお弟子さんである田中二郎さんと市川さんが生態人類学を牽引していくなかで、お互いのフィールドについての情報交換なり、それを論文に書いたりとかあったと思うんですけど、今度、そういうような動きとかは想定されているんですか？

安岡：いや、まあ、今後っていうか、この基盤Sで、ということですかね(笑)。

林：そうですね(笑)。どういう感じでコラボレーションをされていくのか、イメージを伺いたいなど。

高田：いろんな接点があるんだけど、「知識」とか「生態」とか。あと「子ども」もあるかもしれんし。

安岡：ぼくのいままでのフィールドワークは、バカの生活と一緒にいって行って、彼らの「生き方」を大づかみに把握するようなデータを取る、というスタイルだったんで、たとえば、ある場面に焦点をあてて、その場面のビデオを細かく分析するみたいな研究はやってないですね。そういうのもやってみたい、という気はします。



航空写真 カラハリ砂漠に囲まれた・ボツワナ中央部の村(左) 熱帯雨林に囲まれた・カメルーン東南部の村(右)

高田：バカ語も一緒に勉強したしね（笑）

（2）サンとバカの生活

林：高田さんはこれまで何度かカメルーンには行かれてて、今年の2月には私も少しご一緒しましたが、安岡さんも2016年に2週間程度ですけど、丸山さんと市川さんとナミビアに行かれて、ブッシュマンの集落に行かれたんですよね？

安岡：行きました。ブッシュを歩くツアーに参加したりしました。

高田：ナミビアのどこ？

安岡：北西ですね。国境の辺まで行きましたよ。ボツワナの。飛び出ているところまでは行ってなくて、Thomas Widlok さん(University of Cologne)とかが行ってる辺りじゃないですか？

高田：チンツァビスあたりかな？

安岡：ぼくはほとんど運転手で、はじめてブッシュマンを見る、というのが最大の目的でした。

林：サンですよね？サンの集落などにも滞在されたんですか？

安岡：いや、集落ってというか、観光キャンプみたいなところに行きました。そこの人たちと車に乗って少し離れたところに行って、一緒にブッシュを歩く、みたいな感じのところでした。

高田：そういう施設あるね。

安岡：まあ、いわゆるエコツーリズムですね。丸山さんがそういうテーマの科研をしていました。

林：なかなかピグミーとブッシュマンを両方見ている研究者はいないと思うんですけど、印象はどうでしたか？

安岡：まあ、顔は違いますよね（笑）。ピグミーは目がくりくりっとしていて、ブッシュマンは細いですよね。どちらかというと、ぼくはブッシュマンよりですけど（笑）。

高田：向こうも思ってたかもしれんな（笑）

安岡：杉山さんとかもそうじゃない？

杉山：ああ、言われる（笑）

林：生業を見るとか、日常生活を見るとかは…？

安岡：まあ、木村さんとかも言っていたように「押し」の強さをほとんど感じないような、そういったところとかはありますよね。

林：それは、なんか「狩猟採集民的」ということですか？

安岡：…アフリカの狩猟採集民的、なんじゃないですか。

高田：わちゃわちゃとしている感じ、やる？

林：逆に、高田さんがピグミーを見たときに、ある種の、ブッシュマンとの共通点や大きな違いとか、印象的なことはありましたか？

高田：違いというか…。僕らが行っている、杉山さんもそうだけど、「元」狩猟採集民みたいな状況になっているから、カメルーンに行ったら「わぁ！狩猟採集民や！」みたいな（笑）。「めっちゃ（狩猟採集）やってるやん！」。狩猟がほんと生活の一部になってるなあ、つてのを。もちろん、サンも（狩猟を）やるんやけど、こっそりやったり、一部の人がおびえながらやったり。昔やってたことを、思い出してやってみたり。…みたいな文脈が多くなっているから、そうじゃなくて、「みんなが狩猟」って思っているすげさ…

林：だからこそ、（プロジェクトのテーマにある）カメルーンにおいては生態学的知識と伝統的知識ってところに焦点があるっていうか。

高田：そうやね、その違いが何から出てくるのかってね。変化から来ているのか、もともとやっば違うのか。環境、森と草原という環境が違うのか、まあ、全部関係してそうな気がするけど。

安岡：その、動物の場合は、ボツワナでもナミビアでも、いるのはいるんですか？

高田: まあ、定住地がすごくおっきくなっちゃったから、その付近にはあまりね、基本的には、もともとサバンナ、っていうかステップ（気候）やから、動物相も密度が低いから、自分で探しに行かんとなかなか捕まらへん、ちゅう…。

安岡: 群れるやつはいないんですか？ ヌーとか？

高田: ゲムズボックとか。でもゲムズボックっていても、数頭、やん？

安岡: ああ、そうですか。

高田: それを馬で追い詰めて、っていうのはできるけど、馬猟（騎馬猟）になると僕らはもうついていかれへんから、そう微細に観察できへんけど。まあ、それですごく捕れていたときで、1日5頭とか。

安岡: 5頭というのは、その狩猟団のなかで5頭？

高田: うん、数人の狩猟団で。

安岡: 5頭って、多いですよ。

高田: やっぱ馬の機動力は、ゲムズボックを完全に上

回っているから。でも、むかしの弓矢猟やったら、一頭で手一杯。一頭も捕れないことのほうが多いくらいだけ。

安岡: ぼくらのところでは、鉄砲があるのと、罠のワイヤーですよ。でも、馬のような機動力を大きく向上させるテクノロジーはないですね。それが大きな制限要因ではありますね。

高田: あれ？ 犬ってぜんぜん使わへんのやっけ？

安岡: います。槍猟の時にバカたちが獲物にそっと近づいて槍を投げ刺すんですけど、一撃で死ななかったり、槍は外れたりすると、獲物がババッと逃げていきます。それを犬が追いかけて行って、噛みついて足止めします。そういうのはあります。

林: そういえば、20年くらい前に、私の調査地に安岡君が来たんですよ。私の調査地には犬が結構いて、安岡君が（自分の）村に戻るときに「僕のそこには犬がないから、一匹もらってっていいですか？」って言って、一番凶暴そうな子犬を持って行ったんですよ。それが、すごい立派な猟犬になったって聞いて。動物も



写真 8 (左) 酒場に集められたたくさんのビールの空瓶とブッシュマンの人びと
(右) ブッシュのなかで茅葺屋根に使う草を採集するブッシュマンの人びと
(撮影 杉山 由里子)

捕まえるんだけど、人にも噛みつくて（笑）。

安岡：そう。20頭くらいイノシシを捕まえました。最後はイノシシに腹をやられて死んだみたいですね。

高田：犬、見たことある？ 猟のときの（→杉山さんに向けて）。びっくりするよ。あんなよたよたして死にそうなのが、ものすごい生き生きして走って、獲物を「バァー！」っと追い詰めていって、隅っこの方に動けんように。「ワンワンワンワン！」て。

林：それはいつぐらいにご覧になったんですか？

高田：いつかな？ そんなに昔じゃない。もう、ニューカデに移住してから。

安岡：相手は何ですか？

高田：そんな時は、ステインボックか何かやから、ま、ちっちゃい。

杉山：人間もそんな感じかもしれない。ふだん飲んだくれて…。

林：バカでも、村ではふらふら飲んだくれて、ぜんぜんダメだなんていう人に限って、森に行くといろいろ知っていたりとか、生き生きする。よくいますよね。

（3）サンとバカの子育て

林：現地（カメルーン）に行かれてて、バカの子育てであるとか、そういうのを見る機会が多いですよね。研究とは別の話でもいいんですけど、彼らの子育てや子どもの相互行為を見たときになにか感じたこととかありますか？

安岡：ある年齢で、こちらを見たら「うゑーっ！」って泣く子どもがいるじゃないですか。ちょっと見るだけでも「うゑー！」って泣きながら母親とかの後ろに隠れてしまって。それがある年齢をこえると、ぜんぜん怖がらなくなるんですが、その境目って、わりとはっきりある感じがします。

林：いくつぐらい？

安岡：歩き始めるぐらいで、まだよたよたって歩いているぐらいの時は、一番怖がりますよね。小さすぎると、まだ怖がらないんだけど。

林：いわゆる「人見知り」というのとは違うんですか？

安岡：人見知りだけど、いわゆる「白人」ていうか、黒くない人を怖がる感じ。知らない人ひとでも現地の農耕民とかだったら怖たぶん2歳ぐらいだと思うんですけど。すごく怖がりますね。

林：確かに、私も経験あります。なんかあるんですかね？

高田：あるけど…。相手の行動を予想できないっていうのが一番おっきいから。普通、お母さんとか家族とかがいるときとか……（？） あんまみたことのない人で、自分の知っている言葉でしゃべってなくて、何するかはわからん、ていうのは怖い。なので、何するかわかりやすくしてやると、同じこと繰り返したりしていると、わりと近寄って来たりするよ。

林：それはバカに限らず、サンに限らず、日本人なんかでもそうなんですかね？

高田：そう、人の個別認識ができるようになるっていうのと、まあ、運動はしているから、6ヶ月くらいまでだと誰にでも笑いかけるとかあり得るけど、10ヶ月ともなってくると、言葉はしゃべれなくても個別認識してるから、お母さんとお父さんは違うし、お父さんとまた隣のおじさんはまた違うし、ってなると、お父さんなら予想できるけどおじさんなら予想できないっていうのが、より際立つ。

安岡：そういうときに、カテゴリー化、つまり個別認識別よりは上のレベルで、バカなのかとか農耕民なのかとか、あるいは白人なのか、といった区別は、すぐにできるようになるんですかね。

高田：それ自体が研究のテーマになると思うけど、たぶん、子どもの認識として上からこう延びる（？）…じゃなくて、下から「いつもある、この人」「いつもちょっと端にいる人」、ってだんだんそれが広がっていくんだ



写真9 採集した蜂蜜は、その場にいる人々で分けられる。量によっては、その場ですべて食べてしまうこともある。
(安岡『アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチビーシーズ歴史生態学』より*)

と思うから、そんなきれいなヒエラルキーにはなっていないと思う。

安岡：その、なんて言うか、もう「お化けを見た！」みたいな感じで怖がる子。ちょっと知らないひとがいて怖いかな、みたいじゃなくて、もう見た瞬間に「ギャー！」ってなる感じ。

(4) 社会性の習得

林：若干、安岡さんのご家庭にも踏み込む話になりますけど、安岡さんにはお子さんが3人いて、研究活動をするなかで子育てもされてきたと思うんですけど、狩猟採集民の子育てとか子どもの相互行為をみてきて、ご自身や奥さんの四方さんも含めて、何か反映されることとかありますか？

安岡：子どもを見ていると、や、うちの子どもがそうなのかなだけかもしれないけど、すごい利己的ですよ。

一堂：(笑)

高田：子は親をみて育つ… (笑)。

安岡：まあ、利己的である、っていうのは、平等であることを要求するっていう側面もありますね。

林：それは3人ともそうなの？

安岡：とくに、男ふたりはそうですね。「なんでそっちにそれがあって、こっちにないの」とか、お菓子とかが一個しかないときに、一人が先にそれを取ってしまったあとに、もう一人がそれに気づくと、「明日買ってくる」って言ってもおさまらないわけですよ。兄ちゃんであれ、弟であれ。「自分には今ないのか」って、それはある意味で正当な要求かもしれないですけど、バカとかだったら、お菓子を割って分けるっていうのは普通にあるんだけど、そこにもうちょっと別の要素が入っていて「これはもう、オレが取ったから、もうオレのもの」とか、あるいは「昨日はお前が食べたから今日はオレのもの」とか、いろんな理屈をこねて自分のものであることを正当化するわけです。バカは、あんまりそういう正当化はしませんね。その場で分けますね。

ブッシュマンってそう？

杉山：見えてるものは、みんなのもの。

安岡：分けるよな。

杉山：でも、見えてないものは知らない。

安岡：そりゃそうだけど、ここに「これしかない」というときに、それをどちらか一方が食べるか。あるいは分けるとするか。それは何によって決まるんですかね。遺伝ですかね。

一堂：(笑)

高田：うちの子、とかさ、1歳2歳のときに、… (?) 「パパとママにちょうだい」っていうとき、ほんのほんのちょびつとだけくれた。

安岡：とりあえず、分けるっていう行為は、どうやって学んでいるのか、あるいは最初からやっているのかってのは、よくわかっていないですよ。

高田：重要なテーマやね。だってチンパンジーは分けへんねんからな。

林：食物分配っていうのは、よく知られてますけど…

安岡：収穫してきたものを分けるっていうのは、ありますよね。だけど、いま食べようと思って手に持ったものを分けるかっていうと、分けないと思うんですよ。たとえばふつうの日本人は。あるいは、ほとんどの人は。いや、わかんないけど。それを分けるという選択肢が出てくるのは、学んでいるのか、どうなのか、よくわかりません。

高田：研究あるよ。なんか、4歳くらいで分けるやつ。世界的にそう。だから、利己じゃない、道徳的なものをクリティカルな時期としていわれた… (?)

安岡：それって、計算ずくで、長期展望に基づく計算で分ける場合と、なんとなく相手の気分を察して「一緒に分けて食べようね」っていう場合は、ちょっと違

うなって思うんですけど、どっちなんでしょうか。

高田：いろんなもんが連動してて、4歳ゆうたら、よく言われる「心の理論」が出現する年代やから、相手がなんかの感情を持っている、「欲しいと思っている」と頭でわかる歳でもある。「安岡が欲しいと思っている」「あげないときっと怒る」…そんぐらいの推論が成り立つ。あと同じように4歳ゆうたら、園田君とかがやってるインストラクティブ・ラーニングって言って、幼稚園イメージしたらいいと思うけど、誰かひとり先生がいてその先生の言うことにみんなが従うってことができるようになる歳で、先生が「分けなさい」って言ったら、「ちえ」って言いながらも分けるようになる。…

林：うちは、子どもはひとりなんですけど、何か自分で「ちょうだい」って言って独占するっていう記憶があまりないんですよ。むしろ、自分の持っているものを「食べる？」ってみずからあげる、というような。

安岡：それは、対等なライバルがいないからですね。

林：そうですね、それは兄弟がいないからとか、そういう環境だからかなと思いますね。

安岡：でも、それは相手の気分とか感情がわかるからこそ、あえて嫌がらせをすとか、そういうのも出てくるわけです。「やつは欲しいと思ってる。でも、このまえオレが欲しいときにくれなかったから、イヤだ」っていうところとか。兄弟っていうのはそういうもんです (笑)。

林：そういうのを見たときに、(狩猟採集民の) 平等主義的なものと全然違うな、と思ったりするんですか？

安岡：全然違うっていうか、二つの考え方がありそうです。まず、他人の感情を推測できるようになるとし

ぜんに分けることがデフォルトなる、という考えがあって、それが別の要因によって抑圧されているのか、あるいは「これはオレのだからおまえにはやらん！」というのがデフォルトであって、何らかのプレッシャーがあって分けるようになるのか、どちらなのか、ということです。素朴に考えると、狩猟採集民では分けることがデフォルトだから、人類みんな、そっちがデフォルトだ、みたいになっちゃうかもしれないけど、そうとは限らないんじゃないでしょうか。「自分のものは、自分のもの」みたいなのがデフォルトかもしれません。だって、たぶんチンパンジーとかはそうですから。

林：いまの話しに関連するかわかりませんが、安岡さんが最近書かれた論文で「狩猟採集民の〈生き方〉とストレス」というので…

安岡：あ、それはわりと適当な話を書きました（笑）。

林：内容については、基本的に労働に対するストレス、ということで。

安岡：そうですね。

林：人間関係におけるストレス、ではない。

安岡：ブッシュマンのところでフィールドワークをした丸山さんが、おもしろいことを書いていて、開発政策にたずさわる人がブッシュマンにたいして「牛を飼育しなさい」とか指導するんですが、ブッシュマンはそういう人のことを「ひとつのこと」というあだ名をつけて、ちょっと馬鹿にしているそうなんです。ざっくりいうと、農耕というのは狩猟採集とくらべて「ひとつのこと」をする傾向が強いわけです。そうするとすくなくともブッシュマンやピグミーは（社会的にであれ、環境条件によってであれ）ひとつのことをするのを強要されると、ストレスが大きくなるんじゃないか、という気がします。狩猟採集民は「狩猟」と「採集」をする人というより、いろんなことをするって考えた方がいいんじゃないですかね。

高田：その点では“Forage”の「採集」って、なかなか良い訳だね

安岡：もちろん、狩猟採集生活でも、想定どおりいか

ない、というストレスはあると思いますけど。つまり、「ひとつのこと」をする傾向の生業と「いろんなこと」をする傾向の生業って考えると、どちらもそれぞれのストレスのあり方がある。でもどちらかというと「ひとつのこと」をするのって、わりとストレスが高いんじゃないか、って思いますけどね。

高田：丸山には（笑）

林：いまの話しは、関連があるとしたら学校教育で、さっき「PのあとはQ」の話がありましたけど、なにかひとつのこと、決められたことをする、というのに繋がりますかね。

安岡：気分がのらないときに「じゃあ、こっちにしよう」と、いつでも自由にふるまいを変えられるのと、長期的プランにもとづいて「ひとつのこと」をやりつづけるのって、たぶん根本的な性質の違いで、「いま、これをやる時間」とか「これをしなさい」とずっとそれをやらせるのは、かなり大変なことじゃないかと思えます。そういうことをしない人たちが狩猟採集民として残っているんじゃないでしょうか。はたいたに、近代化のなかでは「ひとつのこと」をし続けるプレッシャーってどんどん強くなってきた傾向があると思うんですけど、いま逆に、いちおうお金さえあれば何でも食べられる（3000円くらいあれば、わりと何でも食べることができる）っていう感じになっていますよね。もちろん、そのお金を稼ぐためには何かをしなきゃいけない、っているのはありますけど。いずれにしても、狩猟採集生活から農耕生活、近代社会への移行では、いったん「ひとつのこと」にぎゅっと集中しなきゃいけない時期があったんですが、そういう時期を経て「ひとつのこと」ができない人たちが広まっていく余地が、もしかすると、ちょっと増えているのかもしれない。

高田：「都市ノマド」みたいな…。なんかあの、大河ドラマとか見てたら、めっちゃ忍者に共感する。あれ、狩猟採集民やなあ、て。でも、たぶん軍団のなかではじっとして、でもなんかいろいろ調べてきて伝えてくれて…

安岡：日本にも「山の人」というのがいて、わりと

中世ぐらいまで、山の中を渡り歩いている人がいたっていう話ですよ。柳田国男とか書いているの、ありますよね。そういうのじゃないんですか？その、忍者っていうのは。

高田：われわれが作ったイメージがだいぶ先行してしまっただけ、実は、バカやグイみたいなひとたちが結構あったかもしれない。楽しいひとたちもおったんちゃうかな。

林：バカの人たちも、伐採会社には忍者のような感じで（森の案内役として）雇われたりしていましたよね。

4. 今後について

林：いま、SATREPS の大きなプロジェクトを終えるところにきていて、高田さんのプロジェクトのメンバーでもあられますけど、ご自身の研究人生におけるプロジェクトの位置づけとしてどういう風に考えていらっしゃいますか？

安岡：それは難しいなあ（笑）。

高田：まあ、これに限らず、50歳を前にして、安岡宏和博士語る（笑）。

安岡：ひとつ思っているのは、ぼくのこれまでのフィールドっていうのは、基本的には地域レベルでいうと一つなんですよ。カメルーン東南部という意味で。まあ、村はいくつか、広げてはいるけど。博士論文の研究からずっとおなじ地域でやっているっていう感じなんすね。あと20年くらいフィールドワークをすれば、もう一つ新しいフィールドを開拓したいですね。カメルーンでは2001年からやってるんで、いま23年ですね。そうすると、あと同じくらいあるわけなので、なんとかかなりそうな気がします。

高田：Wild Yam Question を Wild Bii Question にしたらしんどそうやな（笑）。うちら（南部アフリカ）のところに、イモ。Bii っていうんやけど。スイカと同じくらい重要で、水分補給のため、でかい、こんぐらいあ

るんだけどな（※ジェスチャー）。

安岡：何の種類ですか？

高田：野生やからいくつもバリエーションあるんやけど、あれ、ついていった方がすごい大変だと思う。

林：池谷さんが出ていたNHKの映像で、大きなイモを山羊とかに与えているのを観ました。

高田：いまは水（※給水車や井戸）が利用できるから、むかしは、イモも絞って…。

安岡：ブッシュマンっていうのはもちろん興味深いですけど、バカのところでは狩猟採集と農耕をやっているんですが、牧畜ってないんですよ。農耕民がヤギとかブタをちょっと飼っているくらいで。だから牧畜民のところに行ってみたいな、っていうのがありますね。

林：具体的には、行ってみたいところとか？

安岡：いや、ありませんね。最近、牧畜民のいるところは治安が悪いところがおおくて行きにくいですね。西アフリカだと、最近行けないところが多いですね。南の方はどうですか？

高田：行ける行ける。カオコランドのヒンバの住んでいるあたり。僕、ここ数年、何回か行ったけど。思った以上に、牧畜をしっかりとやってた。

安岡：そうですか。…じゃあ、南に行こうかな。

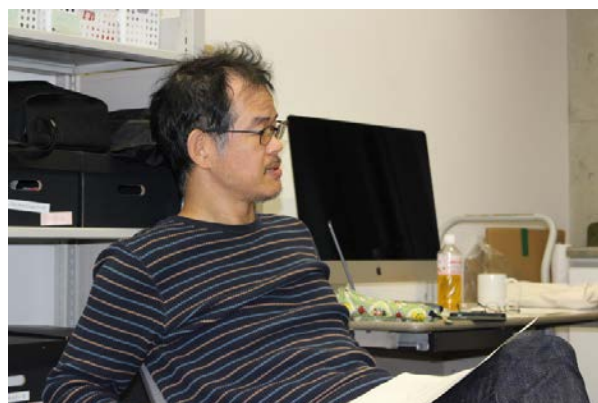


写真10 インタビューのひとつま

一堂：笑

安岡：いずれにしても、狩猟採集から農耕、牧畜まで、生態人類学でおもな対象にしてきた生業を全部みてみたいっていうのがありますね。

高田：うん、院生さんもいい仕事しようとしているし、いいんちゃう。

安岡：その南部アフリカの牧畜というのは、ランチングみたいなじゃなくて、遊牧的な感じですか？

高田：うーん、まあミックスされているけどね。でもやっぱりハウスヘッドみたいな人の決定権すごいいおつきいし、全然こう、統合されている感がなくて。やっぱりこれって、牧畜民的なんやなあ、って思う。

林：熱帯林で他の地域とかは…？

安岡：ああ、そういうのもありますね。地球研のプロジェクトでは、コロンビアとカメルーン、あとガボン、コンゴ、それとインドネシアのボルネオがフィールドに入っています。赤道近辺の熱帯雨林をグルッと回るかんじですね。それを横軸とすると、アフリカの異なる環境に手を広げるのが縦軸というかんじでしょうか。

高田：中米の方もすごそうやな。綺麗そうやし（笑）。いやー、そんなとこ行ってみたいわ（笑）。

林：20年弱、定年までを考えるには時間があるし…。

安岡：そうですね。

林：では最後に、このプロジェクト中に、安岡さんならではの成果とかのイメージは？

安岡：なんか、前に本を（成果として）企画するようなことを言っていましたよね。

高田：カメルーンでひとつ。

安岡：テーマごとと地域ごとという感じだったんじゃない…。

高田：できたらマトリクスにしたいけど。テーマで3（冊）、地域で3（冊）。

安岡：そうか。ぼくの場合は、カメルーンの方に書けばいいって感じですか。

高田：ま、共編にするとか（笑）

安岡：とはいえ、他人に論文を書いてもらう、っていうのは大変ですよ。

高田：自分で書く方が楽や（笑）。ようわかる。

安岡：太田さんとか、アフリカ潜在力シリーズで、どうやってあんなにたくさんの人の論文を収録した本を出したんですかね？

高田：やっぱり、ある程度の強権と、圧倒的にちゃんとやる！っていう…。太田さんなんか、全部赤入れるやんか。あれだけ入れられたら、しょうがないわ（笑）。

安岡：ぼくの場合は半分くらい脱落しそうですけどね。書く人はちゃちゃっと書いてくれるけど、書かない人もたくさんいて、それをみんなで出させるって、どうやってやるのかって、むずかしいですね。狩猟採集民には無理ですね（笑）。

一堂：笑

高田：逆に、狩猟採集民研究者は、みんな「忍者」やから、それぞれの技を尊重したらよくて、「あ、別の班にいたのね」（笑）みたいなとか…。所属性って大事やから、「抜けるんなら腕一本置いてけや」みたいな世界…（笑）。なので、テーマはいっぱいやっているけど、最初とできあがったものがすごい違うイメージになること多いよね。

安岡：何か論文を書くときに、自分で直接集めたデータで原著論文を書くっているパターンと、もうちょっと、いろんな人の研究をもとにメタ分析とかレビュー的な論文もあると思うんですけど、このプロジェクトで期待されていることとしては、生データにもとづく論文を書くとなると、ぼく自身は教育とか子どもの行動についてのデータは持っていないから、これからデータをとる必要がありますね。

高田：むしろ長く関わっているからこそ、何世代も

の蓄積を見ているわけだから、むこうの人や社会の変化、あるいは調査者と調査地の関わりも記録していきたいね。これやって、何十年も直接見ているし、市川さんの代まで遡ればもっと長いわけやから、ナミビアもカメルーンも、うちの京大のチームの特色でもあるから、そういう生き証人として（笑）。

林：安岡さんはやっぱり、（カメルーン、アフリカ熱帯研究として）市川さんから寺嶋先生とかもそうだし、長く見ているので、そのあたりを…。

高田：世代を繋ぎたいな。二郎さんや市川さんの時代と、杉山さんたちの年代との間にいるわけやから。

林：むしろ、書いて頂いたら読んでみたい気がする。学校教育とか、教育への問題意識を、安岡さんなりに加えて頂けるといいんじゃないかなあ、と。

安岡：なるほど。あと3年ですか？まあ何とかなるでしょう（笑）。

高田：まあ、教育とか言わんでも、そこら辺にいるおっちゃんとかおばちゃんとかの子どもだったときとか知ってるやろ？「あんな子どもやったのにー！」それだけで十分（笑）。どんな立派になっているとか、ダメになっているとか（笑）。

林：安岡さんの長くやっているフィールドっていうのは、あまり学校教育のデータがないことが、逆に強みでもあるなあ、と聞いてて思いました。そこから見える視点というか。

* 安岡宏和（2024）『生態人類学は挑む MONOGRAPH 10 アンチ・ドムス 熱帯雨林のマルチピーシーズ歴史生態学』京都大学学術出版

（2023年11月9日 インタビュー実施）



安岡 宏和（やすおかひろかず）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

主たる研究領域：在来知，生態学的知識
調査地域：カメルーン

インタビュアー

高田 明，林 耕次，杉山 由里子

（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）

インタビュー 特集2

メンバー 橋彌 和秀

(インタビュアー: Tebogo Thandie Leepile, 高田 明)

Takada : Thank you very much for taking time after the dinner (laugh). This is for the website, so let me first ask your name and your specialty, Hashiya-san.

Hashiya : Yes. I'm Hashiya, working in Kyusyu University, basically as a developmental psychologist. I'm experimental psychologist and my theoretical background maybe evolutionary theory. I started my career with this experimental study of chimpanzees but after post-doc, I changed my target species to Homo sapiens from Pan troglodytes. The basic interest of mine is evolutionary and developmental origins of

communication and human mind itself. That's my self-introduction.

Takada: Yeah, great. And Tebby?

Tebby : My name is Tebby Leepile from Botswana. I recently finished my PhD in 2023, that is last year, around January at the University of British Columbia in Canada and following that I did post-doc with Tufts University through a program called IMMANA where I was looking at the history and cultural underpinnings of intermittent fasting among the Indigenous San



Photo 1: Tebby san presenting her research findings at a seminar held in Kyushu University(photo taken by Takada in 2024).

people in Botswana and Namibia. Prior to that, for my PhD project, we had looked at household food security and anemia prevalence among young children and women of childbearing age. Currently, I had returned to Botswana with hope to assist in establishing the country's first nutrition and dietetics training program in a public university, and it's something that we are looking into, I don't know how things are going to unfold, so right now I'm in Japan at the invitation of Takada-sensei at Kyoto University. Thank you.

Takada: Yeah, thank you. This is a special kind of the combination because the project I'm running is about the child socialization from the ecological approach and my particular focal area is Africa and particularly contact zone between foragers and agro-pastoralists. My focus is also on the young children from the birth up to five years old kids, so both Hashiya-san's specialty and Tebby's specialty are kind of an ideal combination as one of the focuses is the health and in that ecological condition, so I would like to chat about the several topics in relation to the theme (Photo 1). First of all, we focusing on the socialization but the socialization definitely has a universal and also culturally distinctive aspects, so I wonder how we can draw a boundary between the universal and the cultural specific, so I wonder what kind of topics you studying about the young children and then ask what to ask if that can be applicable to the society in Botswana.

Hashiya: Yes, but it's a long story (laugh). Basically, I started my developmental research with an infant before the language acquisition. For example, we focus on the gaze perception or the reinforcement value of the eye gaze in the infancy, or their music perception. But, we've got to notice that the story may not be so simple. We had limited the target ages from zero up to five-year-olds, but with accumulating the data, we noticed one quite natural fact that the development never stops at the age of five. At around the age of five,

children get ready to use language and communicate with others at a certain level, but still, some aspects of communication of social cognition differ from those in adults (Photo 2). For example, the belief or their explanation about unnatural, I mean out of expectation things, may differ between children and adults. For example, we are focusing to the perception or cognition or belief about the karma, or karmatic belief. Beyond different religions, adult people tend to expect, or hope, something good for the good person who acted in line with the moralistic standards or norms, and in the same way, expect bad things or unhappy endings to happen for the bad people, who deviated from the norms. We tested whether or when in the development such kind of beliefs would come out and have found interesting results. We presented stories to the participant, in which the main character did something good or bad, and then the participant are requested to select the ending of the story from 2 alternatives, happy or unhappy ending. Even children at five-year-old understood the whole story, though, the children preferred to choose the happy ending irrespective of the act of the behavior of the actor. But the adult, as you may agree, expect unhappy ending for the bad person.

Takada: I see, I see. If you do the wrong thing.

Hashiya: This kind of expectation starts, according to our study, at around seven-year-old.

Takada: Uh-huh. Ah, that's interesting.

Hashiya: Thanks. So, this after the acquisition of the fluent communication based on language.

Takada: I see, I see.

Hashiya: Given in other cases, many things or many developmental changes occur, even after the year of five.

Takada: Uh-huh.

Hashiya: So, we are expanding the target ages of our



Photo 2: Scene from Professor Hashiya's research in the "Baby Science Lab" (photo taken by Takada in 2024).

study from "0 up to 5", to "0 up to 10"-year-olds. I currently hypothesizing that, there may be at least two major steps in the development of socialization. As you may know, the children tend to pass the false belief task at around the year of 4, though may depends on culture, but even after that, some important changes could be observed. The first psychological set as a basis for socialization development, that is to say, early knowledges, may be observed before the age of his or her first birthday, and universal in humans and other social animals. This aspect is definitely very important, of course, but at the same time, we have to focus on the ages after the five-year-old, to fullu understand the whole process of human socialization.

Takada: I see, I see. But that's quite interesting, that I agree with that your research result, but still I wonder that the perception of causality come much earlier.

Hashiya: That's right.

Takada: So, what's the differences between infancy or toddler's perception of causality and cause and effect and...

Hashiya: The important thing, in our Karma study, is there is NO causal relation between the act of the person and the event after waiting for them.

Takada: Yeah, that's more like reasons and the consequences.

Hashiya: So there's no reasons even the bad persons have no reason to face with the unhappy event, but somehow we connected to separate things together based on something like the social norms or the moralistic concerns. I think this is the most interesting part. You asked me about the connection between the

causality, the important thing is that there's no causal relationship between them.

Takada: Ah, that's interesting way. If we associate this topic to the culture in Botswana, you know, there is a kind of the beliefs about like, among the San, there's the belief that, we call that "qx'aba," it's also come from the Kalahari, so I have some similarity to Botswana culture, too. Someone curses other people, and that cause disease others. Those kinds of things can be a very traditional way of thinking. But still have practices like a rituals and medicine to that. You learned sciences from the perspective of the nutrition about the health both from physical health and the mental health, so how do you think the socialization in Botswana can be different from your experiences in Canada or Japan?

Tebby: Thank you so much for the question and your insights, sensei. As you know, my area of focus is nutrition, but particularly the interactions between food systems and public health nutrition. In most cases, the nutritional outcomes that people often experience are largely determined by the environment that we live in. So, when it comes to socialization, unfortunately the cultural beliefs that we hold combine with other socio-economic factors, and the outcome, can go either way. Socialization can either help promote health, but also holds the potential to hinder best practices that can support people's health. So, unfortunately I have noticed that in Botswana, we possess rich and diverse Indigenous knowledge or traditional knowledge which in some cases mean we hold different cultural views about different things (Photo 3). Unfortunately, our Indigenous Knowledge is not structured, so in that way, it can be, fuel bad practices that can be detrimental to people's health. Moreover, there is limited dialogue around this topic, particularly around the potential value of strengthening the relationship between our traditional ways of knowing and western science. At the moment, our health care system is western-science oriented. Since there is currently no consensus,

the area seems to be neglected a bit hence is really hard to understand what is going on. Now let's look at socialization as it relates to the San people, our target communities in the Ghanzi district where there is a big problem of malnutrition. One of the interesting revelations is the San's traditional beliefs that people hold about malnutrition that associates malnutrition with the mother's bad sexual behavior of having multiple partners, you know. This cultural belief is contrary to western science which describes malnutrition as a function of poor or suboptimal dietary intake. So, because of these divergent views, the communities' beliefs and western science on health practices, are running parallel, so there's a need to come together. You asked me I have picked any differences in Canada and in Japan. I can't really say much about Japan, but I can say at least when it comes to Canada, I know that they do have something called a "doula system." So, a doula system, I guess this may be an equivalent of what we would hold as a traditional midwife, in our context in Ghanzi.

Takada: Yeah, yeah.

Tebby: So, I think in Canada, there's been an intentional effort to integrate the "doulas" within the system that mothers officially know they have options. One can choose to go with the doula, midwife or they can work alongside me in this journey. Our socialization is grounded on culture. The cultural beliefs shape who we are as people, what we do, what advice we choose to take on even against health care messages. It's our culture the end of day that most of the time dictates, what the communities agree to take on and choose to ignore. So I think it's important that we look more deeply into socialization, to explore the role that it plays in nutrition. Thank you.

Takada: I see. The doula system also it's quite interesting for me, too.



Photo 3: Scene from a rural village nearby Ghanzi, where a number of San people reside (photo taken by Takada in 2023).

Hashiya: Doula system?

Takada: Yeah. It's a kind of the intimate care but it's also integrated in the medical system. Because our daughter was born in the U.S., so it was one of the options to take the doula system and they claim that "OK, you can have a very intimate care from the doula," and we asked how much it cost and they said that it about 2000 U.S. dollar in the month and it's not humane (laugh).

Hashiya: (laugh)

Tebby: (laugh)

Takada: But it touches very important part of the modernity, I think. You know, in the local society, like in Botswana, people know each other and people help each other. So at the time of pregnancy, there are many caretakers around that pregnant women, so it's a kind of integrated in the your daily life. But in the modern system, many system are very specialized

and during that many works, house works becoming invisible, it didn't integrated into the economic bases, so Ivan Illich call that "shadow work." With a rise of the modernity, some works become a very economic activity and some works are hidden behind that. So, in that case, it's important to put in the foreground those works. It should be appreciated.

Tebby: Yes, yes.

Hashiya: It reminds me of the Negayama-sensei's work, about "Ane-mori", a systematic form of allomothering. In the islands of Okinawa, each newborn babies form a (often) non-kin sistership in the community. I am not very sure about the exact system but one girl is decided to be his or her elder sister. And, she forms a bond to the baby and she takes care of her or him as the elder sister. Though it is a kind of labor, it's not a paid work, so, in a sense, outside the economic system. As you may agree, the co-parenting or shared parenting within the community is one of a human feature as a species.

When you put such system in the economic basis, it may cost unbelievably a lot...

Takada: Yeah, yeah.

Tebby: But I think that even that some of these systems that you are talking about appear to be neglected, undervalued and underrated for a very long time. The world has the so called "superior" systems have been enjoying the benefits of the economy over others. Personally, I have a problem with the current status quo, particularly when a system that elevates certain ways of knowing over others. For example, trained midwives from Kyusyu University whose profession and practices have been legitimized by the government have a set cost and economic benefits something which is not the case for traditional midwives; this is a true reflection of the existing knowledge biases and hierarchies in our society. We need to be intentional about creating spaces for Indigenous knowledge in health and other sectors, we should treat all knowledge as equal.

Takada: Yeah, true, true. That can be the other way around, too. The medical doctor, very specialized about the medical scientific knowledge, but still nowadays, more and more emphasis are made on the communication between the doctor and patient. And so, the doctor not just providing scientific knowledge, people claim that they should understand the emotional aspect of the patient and so show the empathy.

Hashiya: But I afraid it's too much to require everything to the medical doctor.

Takada: Yeah.

Tebby: Hmm.

Hashiya: Tebby-san, what do you think about the possibility of coexistence of the local belief to the community and such kind of natural scientific

knowledge?

Tebby: I support that, I support the coexistence of Indigenous knowledge and science. More than that, I assume there might be other ways of knowing out there that we might not know that are yet to be discovered and explored. I am a proponent of diversity especially of perspectives. We should hold a holistic approach to child development. In Ghanzi expectant and nursing mothers receive a lot of support from their communities alongside the services from health care centers. For example, their social contexts provide for the other practical supports from the community; the traditional midwives sometimes offer physiotherapy, emotional support through counseling and many others. I think that all that is needed is to make the traditional midwives' work easier, by legitimizing their services. And also, to economize it as much as it has been saving at the people so it can empower women economically. We also need to change our mindsets, the existing approach that assumes that health care services deserves to be paid while traditional services deserves no compensation needs to be challenged. I think that we can train ourselves to be inclusive of traditional knowledge-oriented services and to equally recognize their value.

Takada: I see. Yeah. That kind of recognition from the society. That's quite important.

Tebby: Yes, recognition is important even by governments.

Hashiya: Maybe again in Okinawa, for example, I happen to hear a phrase in Okinawa, "Isha hanbun, Yuta hanbun." The half of the things could be asked or they inquire to the medical doctors, but another half should be approached to... how do you say "yuta," ... the traditional spiritual practitioner.

Tebby: What do you think about it, sensei? I wanted to say that this also is in line with the approach of the

indigenous people in Canada when it comes to health. It's a holistic view that they hold about someone's health, so they something called the "the Wheel of Health", the belief that our health is more than physical.

Takada: Yeah, yeah. The "yuta" could be divination or divine.

Tebby: Divine?

Takada: Yeah.

Tebby: Ah.

Takada: Like a... not like a fortune telling, but still...

Tebby: Fate?

Hashiya: Yeah.

Takada: The fate or hope or... so, it's a kind of very spiritual thing.

Tebby: Yeah. I am of the view that there is need for coexistence.

Hashiya: I don't know the exact situation in Okinawa, but at least in their society, there is the room for such kind of belief and it coexist with the so to say the modern scientific belief.

Tebby: Science is OK, but science need to not to be regarded as the only way of knowing?

Hashiya: That's right.

Tebby: I think that we need to communicate. Another point that I wanted to bring on board was communication. We need to recognize and acknowledge science and other ways of knowing. Even though we are seeking for them to come together in harmony, it's not going to be smooth or seamless. As I said earlier, in child development, there are some

cultural beliefs that can be viewed as hindering or promoting health. Communication is, therefore, the only vehicle that will give us access into the dynamics available out there. We would know where frictions and the low-hanging fruits are and we would even know where to put our energies. Unfortunately, we continue to work in silos; in most cases we don't recognize or even some context disrespect each other's expertise. This is only proving to be detrimental to our societies. For example, in Ghanzi the emphasis is on western-health care, however, there is a disconnect so while the San communities are also knowledgeable in traditional medicines. We seriously need to improve our communication.

Takada: I see. Yeah. I agree with you that scientific knowledge, it's a very cautious way to accumulate knowledge and I really appreciate that, but some attitude such as religious and cultural beliefs to the sciences could be problematic.

Hashiya: Yes. Maybe the core of science education is to know the process of scientific thinking, as many philosopher and scientist have noted. So, it's a kind of skill, the set of skill to think. Science is something like that, not just the accumulation of knowledge. What is important in science education or the science itself should be to know the process, although, of course, the knowledge, outcome, is also very important in a pragmatism sense. You may ask whether a tablet of medicine is effective on your disease or not. The medical doctor or scientists would say "At the 90% probability, it works". But everybody cannot stop thinking about remaining "10%". The most critical point for the patient should be whether he/she is in the 90% or the 10%.

Takada: Yeah.

Hashiya: But nobody knows this, even the scientists know nothing about it. Knowing science may be, at the same time, knowing the limit of science.

Takada: Yeah, yeah, it's true.

Hashiya: The same thing could be said to the other beliefs like religion or in some other ways of beliefs.

Takada: In relation to the sciences, the concept of the health, one of the targeting concept in this project, too, is quite interesting. The health is very difficult to define, it can be defined negatively out of the illness, but it's also associated with ethical or moral attitude to the life, so how do you think learning the nutrition? It's definitely related to the health, but how do you think about it?

Hashiya: Tebby-san, could I raise the similar question as Akira-san. When we had a chat with you two yesterday, I was really interested in the point that even if the data show that the children are not in the best condition, but the mother sometimes says that there is no problem there. Actually, the mother may be right and the data may be right at the same time. It's directly connected to the definition of health by the mother or the other people. "Nothing happened, so he/she is healthy". So it may related to the stereotype or in other words, idea or images of the children or the development. Your talk makes me think about their body image embedded in a specific culture about the childhood; how he/she is, or looks like. They have their own knowledge about what children or babies are. But maybe, such kind of images changes depending on the history. The history changes food availability, other economic situations, and natural-ecological environments. I am just curious how the image of a child, a baby or development has changed during the history of the rural people, or San people, in Botswana.

Tebby: I am still trying to digest all the information, so I'm trying to converge everything so that I can just give a well-thought-out response.

Takada: Simplifying the question, what is the healthy life from your perspective?

Tebby: I think a healthy life is the one that takes into consideration the different dimensions that we talked about earlier; a holistic view. So now, when it comes to the example that I gave about that young boy and the mother, I think that this example shows as that we need to take few steps back, when we approach communities. Sensei, you talked about the accumulation of knowledge. So let's consider this scenario of a hunter and gatherer who has spent their life in the wild and eventually gets exposed to a new environment and western way of defining health. In a practical sense, this will require them to learn the standard approach of describing sickness through symptoms and signs. In addition, they might feel pressured to frame their remedies or their interventions according to the western ways of knowing which ignores their pre-existing knowledge. The question here is, what happens to the knowledge they have been holding all along? Does it get replaced and discarded?

Hashiya: That's right.

Tebby: We had a situation in one of the villages in Ghanzi where we encountered a child who was severely anemic. This diagnosis was based on the standard cut-offs determined through western science. What was interesting was that the mother was genuinely shocked because she hadn't noticed that her child was not well, so I was the one informing her. In that moment, her traditional knowledge met with science. Can you see that we continue giving priority to western ways of understanding, particularly in health? We seldom seek to learn and find a common ground on issues. Maybe I could have engaged in dialogue to better understand her traditional knowledge on blood health. It was a missed opportunity indeed, I could have learnt more about the San people's cultural understanding of anemia. Thank you so much.

Hashiya: As clinical psychologist and other medical persons have agreed, a diagnosis should be coupled with care for it. It might be important to translate the

scientific knowledge into the mother's belief system. I understand that it should be a hard work, but such a kind of adaptation or translation is a part of the works that's scientists have to do.

Takada: I see, I see. That can be applied to Japanese situation, too. I once saw the data that the occurrence of the developmental disorder increased, like ASD almost triple comparing to a few decades ago. So that I think that can be a trick, I was in the clinical field and had the impression that the in actual occurrence rate not much differ but it's a society that changing. So, in one sense, that can be related what is a social norm that are expected for the children, in the other point is if the society provides the enough care system without that the triple of the occurrence rate could be a burden for many caretakers.

Tebby: Uh-huh.

Hashiya: Uh-huh.

Tebby: Yeah, even the way sensei to appointive in the way more nutrition right now is a beyond just their definition and how is understood. Even when you look at the traditional approaches that a guardian sends mothers used to evaluate a child's progress. They are different, right? Yes, I know that in our field focusing on, the weight and the height, right? But I think that now we because we do recognize that the communities, the traditional knowledge hold as play a critical role also in contribute in recent these children up that we need to see how they themselves within their homes, how do they evaluate a child progress. You know how like sometimes they use just the these,



Photo 4: A meal plate (of Christmas feast!) at a rural village nearby Ghanzi (photo taken by Takada in 2023).

you know, around the child ways, you know. Yeah, that is just beyond aesthetics, you know. It's also used to gauge like a child school then all that, and I think we need to pay attention to that like we need to begin to document those things, we need to recognize them that they are critical, we need to fit them somehow within our systems.

Takada: I see. Similar thing can be said to the obesity. Among that Glui and Gllana, if you have the fat, it's a kind of the compliment (laugh).

Tebby: Hmmm.

Hashiya: Uh-huh?

Takada: They say that it's you and you become big, but it's in a very positive sense. And if you become thin, zayanha, and it's a kind they are afraid about you are suffering from the sickness, so now another indicator like a high blood pressure or diabetes and other many diseases associate with the fat, so it's very complicated issue how we integrate into the belief system, without scientific knowledge.

Tebby: Yeah. Sensei, I don't know where we discuss this further, but do you remember we once talked about the power of language in one of our meetings with Umino sensei. Malnutrition scientifically is a very broad term that means an imbalance of nutrients in the body. One important example is our language around obesity, an area I'm interested in because of the ongoing destruction of our food systems as they gradually get westernized which has detrimental health impacts (Photo 3). Unfortunately, our in Botswana, we have developed negative stereotypes and language around obesity which can be demeaning. Let me give you an example, when I was at the university of Botswana, doing undergrad, I was a little bigger. I remember one time meeting a former classmate from junior high school I and she said to me "Oh! You are

so big! OMG, you are like a pig." I was devastated. Unfortunately, these negative remarks are also directed at women even after giving birth. Undernutrition in children is scientifically defined using 3 indices; underweight, wasting and stunting which holds different health implications. However, in the Ghanzi district, child undernutrition is commonly referred to as underweight. It would be helpful to research further so we can understand the narrative around underweight, to investigate whether it is a cultural construct or not, where the language was acquired and the meaning behind it. This is particularly important because putting clumping all the indices together and referring to them as "underweight" might inadvertently downplay the detrimental impact of stunting and wasting.

Hashiya: How was changing the angle like..., for example, more food is necessary for children. And less food is necessary for the overweighted. But maybe the "less" food is not the positive word... How about the "balanced" food?

Tebby: Ah.

Takada: Uh-huh.

Hashiya: The food should be balanced. More food is necessary. For example, the enough food is good but if it is too enough...

Tebby: Like maybe shift the language and focus to food.

Hashiya: To the matter of food. That's right.

Tebby: Not necessarily like to their body, to say that the body is underweight, the body's wasted but maybe to say I encourage you to, is that obscene to you are overweight, maybe I say you need to reduce your...

Hashiya: Reduce your food or select the one low calorie.

Tebby: (laugh)

Hashiya: Low calorie should be selected for him.



Photo 5: Tebby san and Takada visiting the wonderful library of Kyushu University (photo taken by Hashiya in 2024).

Tebby: (laugh) Yes, yes, yes. I don't know, as I always say like me and sensei have lot of work to do, I've been thinking about that like how can we reform our language, you know, to make it more accurate while remaining respectful and kind.

Takada: I see.

Tebby: In the way that is supporting of people to take care the necessary steps like you are saying.

Hashiya: Yes. Or they prepared the list or recommendation for food for the overweight people. The more vegetables are listed in the recommendations.

Tebby: That's a very powerful intervention that can be so beneficial.

Hashiya: Uh-huh. I see.

Tebby: As I said, I think the language that the society has around some of these our conditions needs to be looked into. For example, in our society back in Botswana, there are some derogatory remarks or phrases such as "you look like a legwinya" which means a fatcake. We cannot go on like this.

Takada: (laugh) That's interesting. Yeah, I also had G|ui and G||ana the phrases sometimes very shocking for me (laugh). Like a... for example soothing the child, but sometimes just say "fuck all" for something. (laugh)

Hashiya: (laugh)

Tebby: Uh-huh. Yeah, yeah.

Takada:But still, it's not the fuck off in the western sense.

Tebby: hhh not in Western sense.

Takada: The way to express yourself and emotion is a very important part of the peacing your mind (laugh). Ultimately, it related to the health, I think. I see. Maybe it's time to...

Tebby: Maybe it's time. Thank you so much for the discussion (Photo 3).

Hashiya: Thank you.

Tebby:It's always wonderful to learn from both of you. Have a good night.

(2024年2月20日実施)



橋彌 和秀 (はしやかずひで)
九州大学 人間環境学研究院・教授
主たる研究領域：乳幼児の行動分析, 実験的観察法

インタビュアー

Tebogo Thandie Leepile

(Botswana Internaxtional University of Science and Technology)

高田 明

(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究 研究科)

カメルーンにおける紙芝居を使った衛生意識の醸成 林 耕次 (京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科)

前回, Newsletter No.1 では, 日本における紙芝居の制作過程について報告しましたが, 2024年2月~3月にかけてカメルーンにおいて紙芝居を用いたアクション・リサーチを実施しました。

紙芝居のテーマは, 啓蒙的な狙いを踏まえたバカ・ピグミーの生活環境における水・衛生に関わるものです。完成させた15枚の紙芝居をカラーコピー, 及びラミネート加工したうえでA4サイズとA3サイズを一部ずつ現地を持ち込みました。ストーリーとして紙芝居1枚ごとに, 英語とフランス語に翻訳したのち, 渡航前にASAFAS所属のカメルーン人研究者であるTowa O. W. Kamgaingさんに日常的なカメルーン=フランスへの意識に協力してもらいました。カメルーン的首都ヤウンデでは, Kamgaing版のテキストに対して, カメルーンにおける衛生関連の事情に詳しいAssociation Tam-Tam

Mobile (NGO) 代表のSimon = Pierre Etoga氏に若干の補足修正をして頂きました。

東部州の調査地ロミエでは, 現地で活動するASTRADHE (バカの教育支援などを行うNGO) の協力を得て, メンバーであるバカのAleka Raymond氏にフランス語版からバカ語への翻訳をして頂きました。その後, 本人に朗読してもらった様子を動画撮影して, ロミエ近郊に居住する数名のバカに観てもらい, バカ語としての用語について, また, 内容に関して意図が通じるか議論を重ねながら修正を重ねました。ロミエ境界では, バカ語のテキストを正確に読むことができる人が限られるため, 修正後のバカ語版テキストをAleka氏に再度朗読してもらった様子を改めて撮影して, それを数名のバカに何度か観てもらい, 紙芝居に合わせてそれを聴衆に伝える, という方式で何度か紙芝居の実演を試みました。その後, テキスト (=朗読動画) に頼ることなく, 画に書かれた情報を話者独自の視点と解釈で聴衆に伝える方法でも, 子どもたちを対象に何度か実演を行い, それらの様子について撮影をしました。

もともとのストーリーは, 水や衛生に関する現地情報を集約させつつ, 長らくカメルーンのパカ社会を対象にフィールドワークを行ってきた経験を踏まえて報告者によるアイデアをもとに描かれたものですが, 例えば, 日本語で「バイ菌」を示すことばや, 画としての表現方法は実際に現地で実演するまで聞き手や観衆に伝わるのかが未知数でした。なお, 「バイ菌」を英語とフランス語に直訳すると, それぞれgerms/germesになりますが, Kamgaing氏によると, カメルーンではmicrobes (=病原菌, 細菌, 微生物) に置き換えた方が子どもたちを含めて最も伝わりやすいとの指摘を受けました。さらに, バカ語ではバカ語の辞書 (Brisson 2010) でも該当する単語がみつからなかったため, いくつかの候補となることばを募り, それらを検討したのちに採用に至りました。

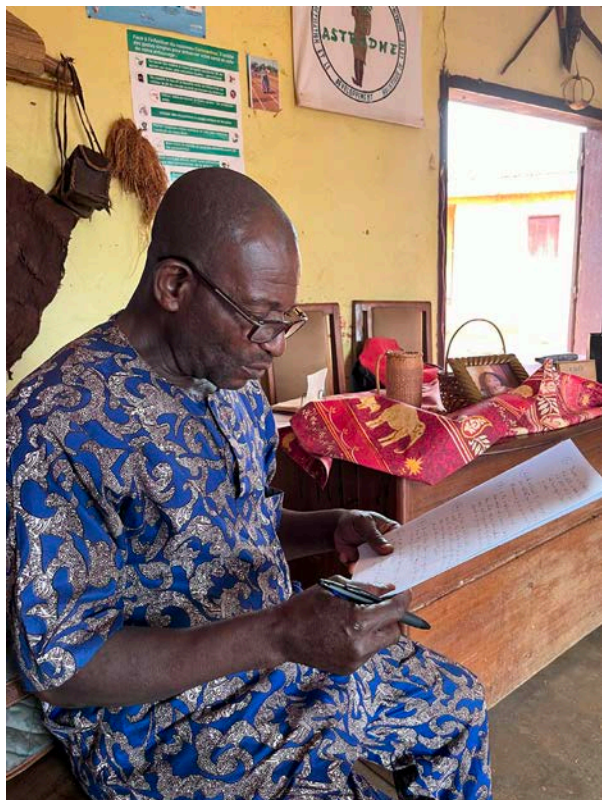


写真1 ロミエにあるNGO ASTRADHE所属のAleka氏によりバカ語に翻訳して頂いたテキストを自ら朗読してもらう。



写真2 森のキャンプ滞在中の子どもたちに、持ち込んだ紙芝居をみてもらった。

当初の目的であった(1)「話者と観衆(子どもや彼らを取り巻く大人など)とのインタラクション分析」に加えて、(2)「紙芝居の物語り(内容)をある程度理解した話者が紙芝居の実演を通じて、どのように独自のことで伝えているのか、またその受けて(聴衆)の反応」についても今後検討することが見込まれます。

ロミエでのフィールドワークののち、東部州州都のベルトアで、バカの人権支援等を行っている NGO Association Okani の代表 Benant Messe 氏と会談したところ、本企画のプロセスや効果について関心を持ってコメントをしてもらいました。そのうえで、バカの子どもたちに伝わりにくいと思われる画の描写についていくつか指摘して頂くとともに、今後、子どもたちに画材を渡して本テーマ(水や衛生)に関する画を自由に描いてもらい、それらを素材として、別途紙芝居を作成してはどうかといった提案を頂きました。このアイデアは、水や衛生に関する意識をさらに高める効果も期待され、描画時の子ども同士、あるいは周辺の大人たちの関与を観察する上でもアクション・リサーチとしてさらに発展し得るものであろうと考えられます。



写真3 朗読動画を伴った実演後、独自の解釈で改めて紙芝居の再実演(M集落のAmbassa氏による)

海外派遣報告 2024.8-9

高田明 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: ボツワナ・ナミビア・南アフリカ / 派遣期間: 2024/8/1 - 9/6

ボツワナのボツワナ大学, ニューカデ村, ナミビアのナミビア大学, ナミビアルター派福音教会, エコカ村, オナンジョココエ病院博物館などを訪問し, 本プロジェクトに関する研究打ち合わせ, 資料収集, 現地調査などを行った。



New Xade San Craft Shop.



New Xade San Craft Shop で展示・販売されていた木工品や装飾具。



Kleopas Nghikfelwa 氏 (写真中央) が最近オニパにオープンした Oniipa Book Paradise and Internet Cafe. 地域の文化交流・教育の拠点の1つとなることをねらっている。



Oniipa Book Paradise and Internet Cafe の内装。今後、報告者も協力して設備や機能を拡充して予定である。

詳細: 派遣報告一覧



主な業績/関連イベント

論文

河本 裕子. 2024. 焼畑用地選定に関する技能・知識の継承における視線計測技術の利用可能性. 農業農村工学会誌『水土の知』92(6). pp.405-408.

Noguchi, T., Takada, A. 2024. Help to climb up: impacts of modern education among the Glui and Glana. *Hunter Gatherer Research*. Vol.8, No.1-2
<https://www.liverpooluniversitypress.co.uk/doi/10.3828/hgr.2024.4>

Sambo, J., Nyambe, S., Yamauchi, T. 2024. A qualitative study on Menstrual Health and Hygiene Management among adolescent schoolgirls in peri-urban Lusaka, Zambia. *Journal of Water, Sanitation and Hygiene for Development*. 14(1). pp.15-26.
 10.2166/washdev.202

関口 慶太郎・高田 明. 2024. ブッシュマンにおける平等主義原則の再考：ポツワナ、ハンシ地区（カデ、ニューカデ、カガエ）における遠隔地居住者の社会変容の比較分析。『アジア・アフリカ地域研究』24(1).pp.78-110.

Takagi, T. & Morita, E. 2024. Differentiated use of Japanese interjective items *eeto*, *sonoo* and *anoo* in self-initiated, same-turn repair. *East Asian Pragmatics*. 9(2). pp. 190-217.
<https://doi.org/10.1558/eap.27444>

Tanaka, J., Noguchi, T., Takada, A. 2024. Interview with Jiro Tanaka. *Hunter Gatherer Research*. Vol.7, No.3-4.
<https://www.liverpooluniversitypress.co.uk/doi/10.3828/hgr.2024.1>

書籍（単著，編著）

Burdelski, M. 2024. Pragmatic Socialization. In Chapelle, C. A., Taguchi, N. Kadar, D. (Eds.), *The Encyclopedia of applied linguistics, second edition: Pragmatics*. Wiley-Blackwell.

基調講演・招待講演

Cekaite, A. & Burdelski, M. 2024. Children's orientations to institutional norms of space/place in preschool. Paper presents at IEMCA, Seoul, SK. 24-27 June 2024 (25th June)..

学会発表・学術報告等

Yamauchi, T. 2024. Global Perspectives on Water, Sanitation, Hygiene, and Health: Insights from Diverse Contexts and Occupations. Sustainability Research and Innovation Congress. Aalto University (Espoo, Finland) . 10th June, 2024.

山内 太郎. 2024. コミュニティ・サニテーションと月経保健衛生：子どもと地域と研究者の共創（招待講演）. 第33回日本ナイル・エチオピア学会学術大会・シンポジウム／日本ナイルエチオピア学会・東洋大学国際共生社会研究センター. 東洋大学（東京都文京区）. 2024年4月20日.

山内 太郎. 2024. 「再生」としてのサニテーション：「負の資産の分かちあい」から「命の分かちあい」へ。「分かちあい」の起原：ヒトとヒト以外の霊長類における共存の諸相 第4回研究会. 東京外国語大学（東京都府中市）. 2024年6月22日.

山内 太郎. 2024. 世界の子どもたちと未来のサニテーションを共創する. 日本国際保健医療学会 第38回 東日本地方会. かでる 2.7（北海道札幌市）. 2024年7月6日.

子育ての生態学的未来構築コロキウム

第7回 2024年6月20日

対面（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）

The Namibian ecological mechanisms causing landscape formation: Application of remote sensing and GIS mapping

講演者：HANGLA Simon Hangula (Senior conservation scientist. Ministry of Environment, Forestry, and Tourism, Reburic of Namibia)



Formation of "Forest for Gathering" and its Issues on Future Management: From the Comparison between Case Studies in Namibia and Japan



講演者：Yuichiro Fujioka (Kyushu University)

関連イベント

How has the landscape of a giant Japanese horse chestnut forest in Japan been formed?:An integrated analysis of natural and social environmental factors



講演者: Koki Teshirogi (Kanazawa University)

**The 7th Colloquium
of Ecological Future Making of Childrearing**

DATE :20th June,2024 14:00~17:30

VENUE: #Large-sized meeting room, Inamori Memorial Foundation Building (third floor), Kyoto University

PROGRAM

14:00-14:05 Introduction Dr. Akira Takada
(Professor, Graduate School of Asian and African Area Studies (ASAFAS), Kyoto University)

14:05-15:05 Mr. HANGLA Simon Hangula
(Senior conservation scientist, Ministry of Environment, Forestry, and Tourism, Republic of Namibia)
The Namibian ecological mechanisms causing landscape formation: Application of remote sensing and GIS mapping


16:05-16:05 Dr. Koki Teshirogi
(Associate professor, Institute of Human and Social Sciences Faculty of Education, Kanazawa University)
How has the landscape of a giant Japanese horse chestnut forest in Japan been formed?: An integrated analysis of natural and social environmental factors

16:05-16:15 Short break

16:15-17:15 Dr. Yuichiro Fujioka
(Associate professor, Department of Environmental Changes Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University)
Formation of "Forest for Gathering" and its Issues on Future Management: From the Comparison between Case Studies in Namibia and Japan

17:15-17:30 Discussion





Hosted by JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (S) "Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa" (Primary investigator : Dr. Akira Takada)

CCI データセッション

第 117 回 2024 年 7 月 16 日

対面 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

本読み間かせと言語社会化

講演者: 井芹ジョセフ (ハワイ大学マノア校)

CCI ショートトーク

第 1 回 2024 年 4 月 26 日

対面・Zoom によるオンライン開催 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

ガイ / ガナをめぐる場所の物語り

講演者: 高田 明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

第 2 回 2024 年 6 月 3 日

対面・Zoom によるオンライン開催 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

Solar Cooking: A cross-cutting solution



講演者: Prof. Peg Barratt (George Washington University)

第 3 回 2024 年 7 月 17 日

対面・Zoom によるオンライン開催 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

サニテーションからプラネタリーヘルスへ: 負の財の分かち合いから命の分かち合いへ

講演者: 山内太郎 (北海道大学)

関連イベント

第4回 2024年7月26日

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

Development of Distribution Behavior: 5 to 8 Year Olds Do Not Consider the Recipient's Consumption History, While Adults Do

講演者：橋彌和秀(九州大学)

第5回 2024年9月20日

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

Preserving San Culture: Efforts and Future Prospects

講演者：Kuela Kiema (Community Development Officer)



クリック流入音と歯列：歯を失うとクリックはどうなる？

講演者：中川裕(東京外国語大学)

第6回 2024年10月21日

対面・Zoomによるオンライン開催(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)

How to get a life: Culture and practice in action landscapes



講演者：Carol Marie WORTHMAN (Emory University)

事務局より

Newsletter の第 3 号をお届けします。特集記事として、研究分担者の安岡さん、橋彌さんのインタビュー記事を紹介しました。

2024 年 4 月に CCI ショートトークが始まり、第 6 回まで開催されました。最近の関心事について、カジュアルに話すことで基盤 S メンバー間の相互理解を深めることを目的としています。

今後の予定として、2024 年 11 月に African Study Monographs の "Restructuring Ethnicity, Gender, and Ecological Knowledge in the Contact Zones of Namibia" のシンポジウムが開催されます。

表紙を語る



現地の子どもたちと遊ぶことは、私にとってフィールドワーク中の楽しみのひとつです。

この日は、馴染みのオープンマーケットに日本から持参したパステルとスケッチブックを持って行きました。かばんから画材を取り出すと、カラフルなパステルを見た子どもたちから笑みがあふれます。女の子たちが一斉に描き始めました。一通り描き終わると、近くで見ていたマーケットで働く女性たちも代わる代わる絵を描き始めました。しばらくして、みんなで完成した絵を眺めていたら、子どもも大人も家を描いていることに気がつきました。色も形もさまざまな家々には、彼女たち各々の理想が詰まっているようです。

オヴァンボの言葉では、男性が家長である家のことを「大きい家」を意味するエウンプと呼び、女性が家長である家は「小さい家」を意味するオカフムと呼びます。これは実際の家の大きさや家族の人数に関係なく、男性に力があるとされるオヴァンボの伝統的なジェンダー観を示しています。

この女の子たちは今年、小学生になったばかりです。将来、彼女たちが描いたような、理想の「大きい家」に住めるように、これからもここでジェンダー研究を続けたいと思います。

ナミビア北中部オニパの
オープンマーケットにて
2024 年 7 月 24 日撮影
撮影者：渡邊 麻友
(京都大学 ASAFAS 大学院生)

本プロジェクトウェブサイトのお知らせ

アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築



<https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/>





ナミビア福音ルーテル教会のエンゲラ教区機関 (2024年9月5日) 撮影者: 渡邊 麻友

Newsletter no.3

October 2024

2024年10月25日発行

編集・発行: 高田明 (研究代表)

E-mail: cci.takada.lab@gmail.com

